

下野新聞 認知症カフェ プロジェクト2022

オレンジコラム 第二回

家に帰りたいと言うのは、
「安全基地」を求めているから



永島 徹

介護の現場で、認知症のあるご利用者が、「家に帰ります」と施設スタッフに話すことがあります。そう言われた施設スタッフの頭には、どんなことが思い浮かんでいるのでしょうか。おそらく「認知症だから…」が多いのではないのでしょうか。そして、話題を変えたり、お茶などをすすめてその場をやり過ごしたりといった対応が考えられがちではないのでしょうか。しかしそれは、ご本人の思いに込められているものではないかもしれません。結局、その後も、「家に帰ります」という訴えが続いたり、開かないドアの前で帰ろうとする行動をしたりすると、「認知症の方の対応は難しい」「認知症が進んだ」となってしまうのです。

本書の事例では、夕方になると荷物をまとめて「家に帰る」と話す市司さん（仮名）が、「なぜ、そんなことを言うのか」の理由を脳科学の視点から紐解かれています。奥さんが、「何言っているの？ここが家でしょ」と言えば言うほど、大声をあげて怒鳴り出す市司さん。こんな状況が続くと、「（家が）わからなくなるほど」認知症が進んでしまったのか」となり、家族も心身共に負担が増すばかりの悪循環です。けれど、脳科学の視点から、「心が安心できる場所（安全基地）」を求めている」ということが見えてきました。そして「家」とは必ずしも、今本人が住んでいる場所や、生まれ育った場所を指しているわけではないということも見えてきました。市司さんは、一人忙しうに夕食の準備などをしている奥さんを見ていて、何もしないでいる（以前のようにできなくなつてしまった）自分がいたたまれなくなつてしまったのかもしれません。「家に帰る」という言葉には、そんな市司さんの思いが表れているのだと理解できます。それが、わかってくる、対応の工夫が考えられそうです。市司さんは、その後デイサービスを利用

なぜ、認知症の人は
家に帰りたいがるのか
脳科学でわかる、ご本人の思いと接し方

著者：恩蔵絢子 永島徹

定価：1,760円（税込）

発行：中央法規出版



するようになり、しばらくすると「家に帰ります」という言動は落ち着いていききました。ここで重要なことは、施設や自宅がご本人にとって「安全基地」になれるかということです。誰でも、慣れない外出先で、なじみのない人と過ごすということだけでも大変なストレスを感じるものです。その為に、デイサービスが自尊心を脅かされることなような役割を担える機会となるべく配慮し、環境を整えていくことが欠かせません。また、デイサービスから帰宅後、心配のあまり「何をやってきたの？」「楽しかった？」などと、家族が声をかけすぎてしまうことで、「何もやっていない」「そんな所に行つてないよ」などと怒りだしてしまうことがあります。短期記憶は、以前と異なり苦手なこと、それを試されたようで混乱してしまうのです。これではご本人にとっての「安全基地」にはなり得ません。市司さんの場合は、細かいことを本人に確認したりすることなく「一日、お疲れ様」という気持ちで迎え入れてくれた奥さんの対応が、功を奏しました。

「安全基地」は、誰にとっても必要なもの。中核症状のため、日常の暮らしの支障で自信を無くしたり、不安を感じたりすることが多い認知症の方が「安全基地」を求めることはとても自然で、当たり前のことではないでしょうか。



NPO法人 風の詩 理事長
日本認知症ケア学会 理事
ながしま とおる
永島 徹
(認定社会福祉士・認知症ケア専門士)

私たちは「下野新聞認知症カフェプロジェクト」を応援しています。